脱ソニー

独立したほうが自己責任で即決できる強みを生かせる！

(株)モフィリア
代表取締役社長
天貝佐登史

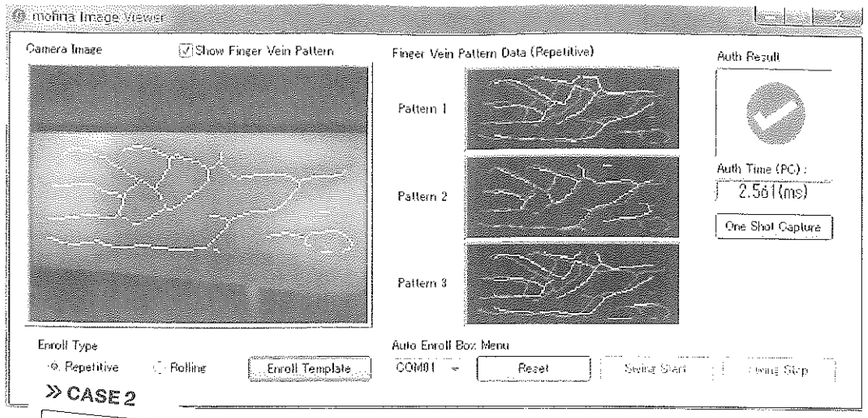
ソニー卒業者たちの長男的存在

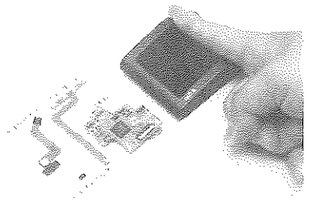
「五反田シリコンバレー」という言葉が、密かに流行っている。ソニーを辞めたエンジニアや中堅幹部たちが、ソニーの旧本社の最寄り駅・JR山手線五反田駅周辺で起業するケースが増えていることから、それを米国のベンチャー企業発祥の地に喩えたものだ。

ソニーのエレクトロニクス事業の象徴だった御殿山（最初の工場・本社があった場所）が、退社後も「ソニーの夢」を追い続ける彼らを引きつけて止まないのかも知れない。

その五反田シリコンバレーで長男的な存在なのが、ソニー時代にロボット犬「AIBO」の事業責任者だった天貝佐登史氏が起業したセキュリティ（生体認証）事業の会社「モフィリア」である。モフィリアは、五反田駅から歩いて五分ほどにある小さなオフィスビルの一角にあった。

オフィスを訪ねると、社長の天貝氏は開口一番、社名にもなっている指静脈認証技術「モフィリア」の特徴を「ハイテクをローテクで使いこなす」製品だと、単純明快なキャッチコピーで紹介してくれた。



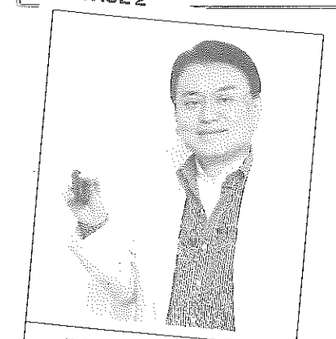


「部品が小さい」「認証が速い」「操作が快適」の3つを特徴とする、モフィリアの静脈認証。写真左のように指定の場所に指を置くと、写真上の表示のようにわずか数秒で認識が完了する。上は登録していた3パターンのうちの2つめに合致した画面。指紋は消えたり偽造されたりするが、静脈ではそういった心配もない。

生体認証という最先端技術を使った製品であるにもかかわらず、誰にでも簡単に利用できる画期的な製品というわけである。

パソコンやキャッシュカード、クレジットカードを使用する場合、パスワード（暗証番号）などで本人確認を求められるが、このような本人しか知らない情報で確認することを個人認証という。その個人認証のツールにパスワードに代わって人間の身体的特徴を利用した個人認証を生体認証と呼んでいる。例えば、指紋や音声、光彩（瞳）、静脈などがある。

静脈には、さらに掌全体（掌紋）と指を利用する二つの方法がある。モフィリアは、後者の指の静脈のパターンを利用した生体認証技術である。



天貝佐登史
あまがいさとし

1954年 栃木県生まれ。 東京工業大学、同大学院で人工知能専攻。79年ソニー（株）入社。テレビビデオ事業本部、米国ソニー、エンタテインメントロボットカンパニーなどを経て、10年退社。同年モフィリア創業

安全な日本にいると実感しづらい世界需要

モフィリアの指静脈認証の仕組みを簡単に言うと、小型の認証ユニットの指定の場所に指（どの指でもいい）を置き、指の腹にリモコンなどに使われる近赤外線をあてて静脈を照らし出し、それをセンサー（カメラ）で撮影してパターンを記録するというものだ。記録すれば、次からは指を置くだけで個人認証をしてくれる。

開発設計部門長の菅原寛氏は、静脈認証が他の生体認証よりも優れている点をこう説明する。

「まず『なりすまし』が困難なことです。パスワードなどは盗まれたり、忘れたりしますし、指紋も新聞等のメディアで偽造による被害が報道されたりしていますが、静脈は生きている本人でしか個人認証が出来ませんので他の生体認証よりもセキリュティは高いと言えます」

さらに、モフィリアの指静脈認証技術の特徴は、認証ユニットが小型で、しかも認証のスピードが速いことである。USB接続の認証ユニットをパソコン（インテル製CPU2・8ギガ）で使った場合、認証スピードは約〇・〇一五秒である。また、指が震えるなど認証ユニットにきちんと乗らなくても、デジカメの手ぶれ防止のような技術で修正するため問題ない。

そうしたモフィリアの強味を、社長の天貝氏は「小型軽量・高速認証・快適操作」という三つのキーワードを使って高精度の指静脈認証をアピールする。

さらに、こうも言う。

「セキュリティのビジネスは、（安全をタダと考えがちな）日本よりも海外のほうがはるかに大きな市場なんですよ。だから、モフィリアを起業したとき、最初から世界に打って出る、グローバルな事業展開を目指しました。とくにインフラがまだ十分に整備されていない中国やアジアの市場開拓に力を入れました」

ソニーで育ったからこそソニー卒業を決断した！

天貝氏は二〇一〇年十二月にモフィリアを設立し、翌年三月から事業をスタートさせている。従業員は天貝氏を含むわずか六名。世界市場を視野に入れた、小